

受賞のことば

インフレもデフレもない社会を目指して

東京大学教授 渡辺 努

物価とは世の中にある様々な商品の価格を集計したものである。個々の商品の「価格」の挙動をつぶさに観察することによって「物価」を知る。私が2006年に始めた研究プロジェクトの新機軸はここにあった。しかしプロジェクトを進めていく過程でわかったのは、「価格」の振る舞いと「物価」の振る舞いは著しく異なるということだ。だから、「価格」について詳しく知ったとしてもそれは「物価」を知ることにはならない。「物価」を理解するには「価格」とは別な理屈が必要だ。

ただし、「価格」の振る舞いと「物価」の振る舞いが異なるというのは、残念ながら、私の新発見ではない。この分野をある程度勉強した人であれば誰でも知っていることだ。私自身も知識としては知っていた。しかし、私の場合、そのことを実感をもって語れるようになるまでに多くの時間が必要だった。

スーパーやドラッグストア、コンビニの食品や日用雑貨、オンラインで販売される家電製品、マンションの広告媒体に掲載される価格・家賃など、様々な商品の価格データを手当たり次第収集し、「物価」へと組み立てていく作業を繰り返す中で、個々の商品の価格の挙動とは異なるマクロの動きが立ち現れることを経験した。

本書の出発点は、その経験を読者に伝えたいということだった。しかしどう伝えるかの知恵が私にはなかった。そのときに助けとなったのは「研究を進める上で味わった興奮と感動を読者に伝えることに徹してはどうか」という編集者からの言葉だった。最初は、「興奮と感動」と聞いても、当時開催されていたオリンピックを連想する程度で、ピンと来なかったというのが正直なところだ。しかし「興奮と感動」はオリンピックの専売特許ではない。学術研究の原動力は間違いなく「興奮と感動」だ。

一般書という本書の性格からして、研究の細部を読者に知らせることは不可能だし、そんな本を書いても手に取る人はまずいないだろう。しかし、「興奮と感動」であれば、読者に伝えられる(かもしれない)し、それができれば、経済学に馴染みのない方たちも含めて多くの方々に読んでもらえるのではないかな。かくして、いったい自分はこれまでの研究生活で何に興奮・感動してきたのか一つひとつ記憶をたどり、その興奮・感動が「物価」に関する、現時点での私の理解とどうつながっているのかを整理するという、私自身これまでやったことのない作業に半年間取り組んできた。その作業がどこまでうまくいっ

たかの評価は読者に委ねることとしたい。

本書の脱稿は2021年10月初であり、いま世界を襲っているインフレが本格化する前のことだ。だから、本書では現在進行中のインフレ現象を正面から扱うことはできていない。しかしそれにもかかわらず、現下のインフレを理解する上で本書が役立ったという感想を頂戴することが少なくない。「価格」と「物価」をつなぐ普遍的な仕組み(の一端)を読者に伝えることに本書が成功し、現下のインフレを読者が理解し、それに対処する上での一助となっているのであれば、望外の喜びである。

わたなべ つとむ

1982年東京大卒、92年米ハーバード大からPh. D. (経済学)取得。
一橋大経済研究所教授などを経て、11年から東京大大学院経済学
研究科教授。59年生まれ。

